

CROSS

NBU 総合インタビューマガジン

N-SPO

誰よりも速いランナーへ

N-CUL

目指せ!映像クリエイター!

Professor's ROOM

理想のまちづくりのあり方とは

おおいた、つくりびと

小学生向け英語イベント初開催!

NBU COLORS

24

2020
MARCH

特集

2019年度
卒業研究
論文合同発表会



2019年度 卒業研究・論文合同発表会 最優秀賞 「情報メディア学科 小島研究室」

2019年度 卒業研究・論文合同発表会で、
最優秀賞に輝いたのは
情報メディア学科「小島研究室」に所属する池田周平さん。
長年、映像クリエイターとして多くの作品を手がけてきた
小島教授のアドバイスを受けながら、
津久見市の災害復旧記録ドキュメンタリーを制作した。



良い作品をつくるための積極的な挑戦。

小島 最優秀賞、おめでとう！
獲れるという自信はあったの？

池田 正直、自分が1位になれるとは思ってなかったですね。皆さんブレゼンも上手いし、興味深いテーマに取り組んでいましたから。でも一つ自信があったのは、2年間じっくりテーマと向き合い、映像作品というカタチが完成できたこと。台風18号の被災があったのが2017年の9月、まだ私が2年生の時でした。研究室への配属は3年生になってからなのですが、ドキュメンタリーにもすごく興味があったし、将来も映像系の仕事をしたいなと思っていました。小島研究室の扉を叩こうと。

小島 押しかけ女房的に毎日来てたね(笑)。先輩たちが企画を考えている時も、僕も企画を出してもいいですかと積極的だった。私は学生に、より深く本質を考えて欲しいから、あえて企画にダメ出しをすることもありますが、池

田君はそれを喜んで、すぐにこちらがアドバイスしたことを上回るアイデアを持ってくる。だから、こっちは楽しくなるんだよね。

池田 正直、始めた当時は技術も構成力も全然なかったのですが、先輩方や小島先生の後ろ姿を見て、やらないことには始まらない！と思って、失敗しても良いから挑戦しようと思いました。今回のドキュメンタリーは災害復旧の工程を時系列順に追っていくものでしたが、途中でこのままだと何かが足りない気がして…。

小島 相談を受けて、私がアドバイスしたのが津久見市の初期対応に注目したらどうか。そこから池田君が災害の翌日の上空からの撮影映像を発見したり、行政と住民の絆というサブストーリーが生まれたね。今回、いろんな人に取材したと思うけど、大変なことも多かったんじゃない？

池田 やっぱ災害の当事者の皆さんから話を聞かないわけにはいかない。というものの最初は、なかなか話を聞き出せずに苦労

しました。回数を重ねる毎に、少しずつ本音で語ってくれるようになりました。カメラを回している時間は10分でも、取材対象者と一緒に時間をたくさん持つようにして、たくさんお喋りをしました。高齢者の方とは健康のこと、漁師さんとは今日獲れた魚の話で盛り上がりたり。

小島 そこがすごく重要なんだよね。人と人として向き合い、仲良くなってわかることがある。なぜ今回、地域の皆さんがあまり復旧工事について話をしなかったかというと、十数人が暮らす小さな集落のために税金を使って、復旧工事をしてもらうことへの心苦しさや言葉にできない気持ちもたくさんあったから。それがここに暮らす人の美学なんです。池田くんには真実にアプローチすることを心がけて欲しいと言ってきましたが、今回は本当に粘り強く真実の言葉を引き出せたと思います。

池田 最初はやっぱり映像を制作するだけという感覚で、これを聞けばもうおしまいたいな気持ちもあったと思います。で

も通うほどに、この住民の皆さんが困っていること、心の声を伝えたいという使命感が湧いてきました。カメラを回す前のコミュニケーションの大切さも学びました。

小島 ドキュメンタリーに正解はないと思いますので、今回は池田くんがどういう風なアプローチで、彼なりの真実を伝えるかを守りました。仕上がった作品を観て非常にバランスがとれていたの、素晴らしいと思ったよ。クライアントである大分県建設技術センターの方が試写を見た時に「たくさんさんの地域の人の声や想いが

伝わる作品ですね」と褒めていただいた。その言葉を聞いた瞬間、池田君、やったね！って嬉しくなったよ。

悩み、迷いながら多くのことを学んだ。

池田 インタビューに協力いただいた方の映像は3時間を越えまですし、どれも本音だと思える真実の言葉がたくさんありました。それを20分ほどに編集していく作業は悩みと迷いの繰り返しで一番大変でした。でも完成した作品

をお見せしたら、津久見市の企業が無償で工事石材を提供していったという地域住民の方が知らないエピソードもあり「この作品のおかげで知ることができた」と、すごく感謝されました。災害からは2年が経ちましたが、「風化させないでくれたい」と「今後の対策につながる」とたくさん嬉しい言葉をいただきました。

小島 このムービーで、住民の日常生活が戻ってきた象徴として、移動販売車がやってくるシーンがあります。地域の皆さんにとって1日1回の楽しみだからみんなチャイミングな笑顔をみせる。そ

んな当たり前だけど、かけがえない幸福感や豊かさを残せたことは彼の財産になるはずですよ。

池田 撮影や編集の技術面だけでなく、人を思いやる、人の気持ちを考えながら話すことなど、多くのことを学びました。就職が決まった映像制作会社でも活かします。

小島 池田君とはこのプロジェクトを通じて、教員と学生というよりは、お互いに良いものを作るために悩み、カタチにしていこう同志という感覚が強くなりました。どう伝わるかなというプランを一緒に考えることがすごく楽しい時間だった。

池田 先生からは、自分に足りないもの、思いもよらないアプローチの仕方をたくさん学びました。先生がよく話してくれた、「自分の眼差しが作品には投影される」という言葉を忘れずに、より深く相手を受け入れるような感覚を大切に、これからもたくさん作品に携わりたいと思います。



テーマ「孤立集落(土砂災害)の記録映画制作及び映画演出の研究」

2017年に発生した台風18号によって、津久見市を始めとする多くの地域で浸水被害や土石流、土砂崩れが発生した。そこで、小島研究室では「公益財団法人 大分県建設技術センター」の災害復旧の記録ドキュメンタリー映像を制作。往復3時間かかる津久見市四浦半島での取材は30回以上にもの

ぼった。地元住民や市長へのインタビューでは、「日常生活を通じた幸福感」や「情報の取捨選択」など、効果的な5つの演出プランを意識して実施。昨年2月の「大分県学生映画祭」でも上映を行い、ゲストの映画監督をはじめ多くの関係者から称賛を受けた。



工学部 情報メディア学科教授
小島 康史
(Yasufumi Kojima)

長年、数々の映像作品の制作に携わり、様々な受賞経験を持つ。現在は人の心を動かす動画コンテンツについて研究。学生とともに視聴者の心を揺さぶる映像づくりに取り組む。



工学部 情報メディア学科4年
池田 周平 (Shuhei Ikeda)
(鹿児島県/県立国分高校出身)

就職先 ケイアイエヌ(有)

2年次から研究室に参加し、多くの映像作品を制作。4月からは映像制作会社で働き、多くの人を感動させたいと意気込む。

2019年度 卒業研究・論文合同発表会 優秀賞

航空宇宙工学科 原田研究室

風力発電機の研究・開発を行っている原田研究室。今回、山本壘さんが着目したのは、トンボの翅からヒントを得た「コルゲート翼」の翼端部分。「形状の違いが効率に与える影響」を研究テーマに、実験・検証を繰り返し、膨大なデータから考察を導き出した。



今後の研究に役立つ結果を後輩たちに残した山本さん(右)と原田准教授。

2019年度 卒業研究・論文合同発表会 優秀賞

建築学科 濱永研究室

宮崎県が取り組む南海トラフ巨大地震対策「津波避難タワー」の研究に取り組んだ濱永研究室の蓮井百音さん。「出身地である宮崎県のために何かできることはないか」を考え、現地アンケートを基に、新たなプランを提案した。



「社会人になっても大学で学んだスキルを生かして頑張りたい」と話す蓮井さん(右)と濱永准教授。

多くの声を取り入れ より良い津波対策を。

蓮井 研究のきっかけは、私の地元である宮崎県で南海トラフ地震の対策として「津波避難タワー」の存在をニュースで知ったことでした。実際に現地に向かい、津波タワーを見た時の第一印象は確かに地震や津波には強いだろうけど、こんなに無機質で固いイメージの建物に避難するのは少し不安になるだろうなと思いましたね。現地の方にアンケート調査を行うと、「階段の昇り降りが大変」、「暑さ、寒さが心配」などタワーに足りない部分、改善して欲しい意見がたくさん集まりました。

濱永 取り組む上で、蓮井さんの研究テーマである構造設計が何に對して、どんな目的を持つのかということをお話して欲しいと伝えていました。私自身も学生の頃に人に押し付けられた研究はなかなかやる気が起きなかった経験があります。建築の現場や色々なニュースからでも「なぜ？」と疑問を感じ、それを解決する力を身につけてくれれば良いなと思っていました。

蓮井 先生のアドバイスを受け、現地アンケートを基に、私なりに目指したものは、できるだけたくさんの方の意見を採用するということ。イスの数への配慮やスロープ

の設置など、障がい者や高齢者の方にも優しい空間を作ろうと思いました。6階まであるフロアも高齢者は低層階に、子どもや妊婦の方は専用のフロアを設けるようにするなど、プライバシーを守ること、より良いコミュニティが生まれるアイデアを随所に取り入れていきました。

濱永 確かに津波避難タワーの存在意義は、命を守ることが最大の目的なので、まずはそれを満たさなくてはいいませんが、それだけでは不十分な美しさ、利便性が建物に必要です。蓮井さんのプランを見て、こまめに出来るんだと驚きました。長期的に滞在するケースでもストレスを軽減する工夫がなされていると感じました。

蓮井 今後は宮崎県庁で建築の仕事に携わっていきます。まだまだ経験を積まなくてはいけないことが多いのですが、もしもの時に、安心して過ごせる避難所に必要なものであったり、被災時に必要となる建物がどんなものかを自分なりに追求していきたいですね。地元のためにできることを、NBUでの4年間の学びを礎に考えたいと思います。

濱永 今回の研究は彼女自身が宮崎県、宮崎市のために「出来ること」を考え抜いてカタチにした努力の結晶。これからも地元の市民の皆さんのために、働いて欲しい

しっかり向き合い 未来の研究につなげる。

山本 3年生になって原田研究室のメンバーになり、先輩たちがやっている研究の目の当たりにして、自分もトンボの翅について深く研究したいという気持ちが強まりました。コルゲート翼は凹凸が目立っていますが、僕は翼端が気になりました。この部分の形状が変わることによって、どんな効率になるかを追求しようと思い実験を繰り返しましたね。まずは3種類でそれぞれ風速を変えてデータを収集。その中で一番良い結果が得られたデータのことをさらに改良して、検証を続けたので実証結果は膨大になりました。少し形状が違うだけでも効率に違いがあったので、その理由を仮説を立てながら整理していくのが楽しかったですね。

原田 山本君には頑張れよ！しか言っていないね(笑)。彼はゼミの中でもトップクラスの実力を持っていてから、君が中心となり他のメンバーを引っ張っていく姿が印象的だったよ。一つのことみんなが集中することで研究室の雰囲気がいよいよ良くなって全体のレベルが上がっていった。山本君とは「これどうなったの?」と立ち話をするだけで次の課題やステップが自然に出てきたね。

山本 自分がみんなより一年間長く研究に取り組んでいる分、知識だったり経験があるのでメンバーと情報を共有するように意識していました。そんなに引張ってやっという感じではなかったですね。今回の研究で翼端の形状により効率が変わったけれど、その原因がまだ突き止められていないので、後輩たちにはその部分をさらに可視化できるように実験を続けてもらえたら嬉しいですね。

原田 彼が今回立てた新しい旗に向かって、研究室の後輩たちがきつと頑張ってくれるはずですよ。自分の学生時代を振り返ってみると、頑張り過ぎて息切れすることも少なくなかった。山本君のように研究テーマとじっくり向き合うタイプは、頑張りどころさえ見つけてくれれば大丈夫だと信じていました。

山本 研究室で原田先生からは専門分野のことだけでなく、研究に取り組む気持ちの面など、多くのことを学びました。やっぱり、なかなか上手くいかないと精神的にしんどい時期もありました。その時に「マイペースでやっていんじゃない」と声をかけてくれたことが嬉しかったです。

原田 研究の世界は論理的な思考だけでなく、手を動かさないとダメだと思う。やるほどに絶対、次の宿題が出てくるけど、だ

です。建築の道に携わる人は、誰かのことを想う気持ちが原動力になると信じて頑張ってください。

テーマ:「宮崎市の沿岸地域における津波避難施設の認識度調査」 —津波避難施設兼コミュニティの場の提案—



南海トラフ巨大地震に向け、宮崎県宮崎市の沿岸地域に設けられている「津波避難タワー」。津波に対して様々な対策がなされているものの、県民の防災意識は低く、タワーの課題も多かった。そこでまずは現地向きアンケートを実施。津波避難施設への認識度を調査・分析することで、施設としての課題解決案を盛り込んだ新たなプランを作成。老若男女を問わず、快適でストレスのない避難生活を過ごせるよう、プライバシーとコミュニティを合わせた津波避難施設兼コミュニティの場を提案した。

テーマ:「コルゲート翼の翼端形状が効率に与える影響の解明」



風車の翼型である「コルゲート翼」において、より少ない風速で最大効率を可能にするための研究を実施した。飛行機の燃費向上に役立つ翼端部分「ウイングレット」から着想を得て、4パターンで翼端の形状で実験・分析。風速が小さいときは翼端の直線部が一番長い翼の性能が大きく、風速が大きい環境下では翼端の直線部が長い翼の性能が落ちることがわかった。今後は、この結果をさらに検証しながら風力発電機の効率向上に向けた研究を続けていく。

からこそ社会に出ても自分で目標をしっかり立てて、焦らずに頑張りたいと思います。

「理論だけで終わらない
実践型のまちづくりを。」

まちの活性化のために、抱えている課題を正確に診断し、適切なアプローチを見出す今西教授。データを集めるだけでなく、それを正確に読み取り、実際に現場の声を聞くことで見えてくる答えがあると、さまざまな活動を行っている。そんな先生にまちづくりのこと、学生たちに学んでほしいことを伺った。



経営経済学部 経営経済学科
今西 衛

福岡大学経済学部経済学科、福岡大学大学院経済学研究科博士課程後期経済学専攻(経済学、社会学)単位取得満期退学。博士(経済学)。福岡大学都市空間情報行動研究所がポストドクターを経て、2015年より現職。主な研究分野は中心市街地再開発、制度設計など。

子どもの頃の趣味は 都市設計ごっこ

今、思えば子どもの頃からまちづくりへの興味はあったと思います。昔、大好きだったのはゼンリンの地図を見ながらチラシの裏に自分なりに楽しまわち、便利なまちを想像して描いてみることでした。「ここここを結んだらにぎわい生まれるかも」と思いながら道路を描き足して遊んでいましたね。福岡県太宰府市で生まれ育ったのですが、小学生のとき、隣の太宰府市にある下大利商店街に大型スーパーができたことも印象的な出来事でした。大規模小売店舗立地法のもと、地元との協議の結果、スーパーの建設と商店街の発展を両立する決定がなされたことと記憶しています。ところが結局、商店街はシャッター街に変わってしまいました。その衰退を目の当たりにして、子どもながらに、何故そうってしまったのかを考えずにはいられませんでした。

現場に出向き、声を聞くことで 大切なものが見えてくる

大学時代、ゼミの先生に勧められた『規制緩和の経済学』(加藤雅)という本との出会いをきっかけに本格的にまちづくりの研究を始めました。大学院、そしてポストドクター時代は、理論に基づいた経済効果の測り方を学びました。常に大切にしてきたのは、現場の声を聞くこと。理論や数式ばかりを唱えるのは机上の空論で、リアルな結果とはかけ離れてしまいます。まちづくりに取り組む地域の方々や担当者、理想のイメージを話し合ったり、現場で感じたことと理論を織り交ぜたプランを提案したりしながら、理論を応用した実践研究を続けてきました。当時は福岡の大学に所属していましたが、大分市内の回遊行動研究にも携わっていました。NBUの学生たちも同じ研究に関わっていて、皆、すごく真面目に取り組んでいた姿が印象的でした。その時からNBUとのご縁が繋がっていたのかもしれない。

まちの活性化は「自分ごと」である

まちづくりの事例で、しばしば起こりがちなのが、単発イベントを開催して一時的に盛り上がり過ぎて終わってしまうこと。あるいは、リスクを考えずに箱物をつくったものの集客を実現できず、テナント料を払えなくなって撤退というケースも多いですね。イベントや箱物に頼るのではなく、大切なのは、どれだけの人数が来て、どれだけの経済効果があるのかを想定し、しっかりと検証することです。費用対効果が悪ければ、その原因はどこにあるのか?学生たちにはその部分まで突き詰めて学んでほしいですね。まちづくりについて考えることは、結果的にそのまちで暮らす人の生活や人生にもつながってくるのです。イベントや箱物に頼らないまちづくりのあり方を、今、行政も企業も、多くの人が模索していますが、チャンスはどこにでも転がっていると思います。私の座右の銘は、「凌雲の志」。これからも志を高く持って、理想のまちづくりのお手伝いができるよう、前に進みたいものです。



あおいた、つくりびと Happy Valentine's ～海外の文化を英語で学ぼう～

あおいた、つくりびと

地域の皆さんとともに元気なまちをつくりたい。未来を拓く、あおいた、つくりびとになりたい。そんな想いを胸に、大分県全域を学びのフィールドにした活動を展開しています。



地域の子どもたちへ 英語に親しむ機会を届けたい。

地域の小学生対象の英語体験イベントを初開催。情報メディア学科こども・情報教育コースで小学校教員を目指して学ぶ学生たちと子どもたちが海外のバレンタイン文化を英語で学び、交流しました。



Chapter 1 子どもたちが楽しめるイベントに

学生4名とネイティブの英語教員2名が犬飼ふれあい児童館に向き、犬飼小学校の1～6年生約20名と英語体験イベントで交流した。地域の方々と連携し、地元の小学生たちに英語を使って、海外の文化を楽しく学ぶ場を届けることを目標に、1ヶ月以上前から何度もミーティングを重ね、さま

ざまな企画を準備した。当日は、海外のバレンタイン文化に関する〇×クイズや、英語のバレンタインソングを歌うなど、会場は大いに盛り上がった。始めは緊張していた学生たちだったが、子どもと同じ目線に立って、楽しみながら企画に取り組んだ。終始笑顔があふれ、にぎやかな雰囲気だった。

Chapter 2 子どもとの触れ合いの中でさらに高まる教員への想い

つづいて、バレンタインに大切な人へメッセージを送るという海外の風習に習って、バレンタインカードの制作にチャレンジ。カードに飾り付けるパーツは英語を使いながらショッピング形式で集め、小学生が気軽に英語に親しめるようユニークなプログラムも企画した。完成後のカード発表会で

は、子どもたちは身振り手振りを交えながら上手に発表した。バレンタインにちなんで、チョコレートのプレゼント付きのビンゴゲームを行い、最後まで飽きずに楽しめることを意識。小学生との触れ合いを実際に経験することによって、学生たちの教員になりたいという想いは更に高まった。

MEMBER'S TALK /

イベント中に気づいていたことは?

元々、子どもと触れ合うのが大好きで、小学校教諭を目指しています。今回のようなイベントへの参加は初めてで、実際に指導する立場として前に立つと、緊張しました。子どもたちに楽しんでもらうためには、自分たちも思い切り楽しもうという気持ちを意識しました。指導とイベント進行を同時に行なうという難しさはありましたが、学生の役割分担を明確にしたことで、スムーズに進行させることができました。

イベントを通して感じたことは?

2020年の英語必修化に向けて、英語の授業を取り入れている小学校も多いため、流暢な英語を話す子どもも多く驚きました。予想以上に楽しんでくれていたので嬉しかったです。大学でも模擬授業などに取り組んできましたが、今回のイベントで教員になりたいという想いがさらに大きくなりました。今後もこのような機会に積極的に参加し、子どもと接する機会を多く持ちたいです。



工学部
情報メディア学科2年
鳥越 幹緒



今注目のスポーツ選手をご紹介します！

i-SPO

Track & Field

経営経済学部 経営経済学科3年

山田 泰史

誰よりも速く、
誰よりも熱く。

05

地元大分を
盛り上げる映像を
制作し続けたい。

工学部 情報メディア学科3年

河野 慎治

Video

i-CUL

次世代のクリエイターはキミだ！



長崎県の島原半島を舞台に、毎年12月に開催される「島原学生駅伝」。翌年の出雲駅伝の出場権をかけて、毎年九州の大学生ランナーたちが熱戦を繰り広げる。レースの流れをつくる重要な1区を任された山田泰史さんは、見事区間1位の走りですすきをつなぎ、NBU陸上競技部を総合3位という結果に導いた。表彰台は勝ち取ったものの、山田さんには満足のいくレースではなかったようだ。昨年10月に膝の靭帯を痛め、約1ヶ月間は練習もできなかった。レース前日に痛み止めの注射を打ち、足の痛みと戦いながらの試合だった。「調子は万全じゃなかった。区間新記録も出したかったし、もっと2位との距離を稼いですすきをつなぎたかった。後悔が残る大会」。その思いが今でもくすぶっている。

もともと陸上競技を始めたのは長距離選手だった父の影響。中学卒業までは陸上競技と野球の二刀流だったが、陸上部顧問の厳しくも温かい指導もあって、タイムはどんどん向上した。そこからさらに長距離の魅力にのめり込み、高校では陸上の道1本へ。

「高校のときは、監督の指示通りに練習をすれば結果が出た。しかし、大学では自分でしっかり考えて練習やレースに臨まないと結果はついてこない」。長年、九州の長距離界を牽引してきた彼の言葉には重みを感じられる。この1年は陸上競技部の主将として、エースとして、部員たちを引っ張ってきた。自身のケガを治すだけでなく、個々のモチベーションを高めながらチーム全体を強化する大変さを実感。「新主将には、陸上とまっすぐ向

き合いながら、チームをまとめていってほしい」と話す山田さん。

普段から「とにかく距離を踏む」と意識していると話す通り、多い日は30kmの走り込み、オフの日も自主的なジョギングを欠かさない。「毎日走らないと気持ちが悪い」と話すほど、「走ること」は、山田さんのライフスタイルの一部なのだ。また、試合の1カ月前から食事管理を徹底し、完全に身体を試合モードにシフトさせるというストイックさも持ち合わせる。陸上競技は、努力すればするだけ結果がついてくる。それが魅力でなかなかやめられないそうだ。故障で悩むときも、タイムが思うように伸びないときも、「誰よりも速く走りたい」、そんな思いが彼を熱くする。「大学卒業後も実業団に入り、陸上を続けていきたいですね」。

今回のレースは4月に熊本で開催される試合。実業団のスカウトマンたちも多くかけつけるこの大会で良い結果を出し、しっかりとアピールしたいと意気込む。また、引退試合でもある島原学生駅伝では、エースとしての役目をしっかりと発揮し、今年こそ後輩たちに出雲駅伝の切符を渡したい。日本陸上界のエースを目指す夢への一歩はすでに始まっている。



やまだ たいし(大分県/日本文理大学附属高校出身)/2018年の島原学生駅伝では、5区で区間新記録をマーク。トラック種目の専門は5000m、10000m。「9月の日本インカレでは、昨年の雪辱を果たしたい」と、活躍を誓う。

電車が突如軽快なラップを歌い出し、JR九州のネット予約サービスのお得さをわかりやすく伝える。このユニークで印象的なCMは、昨年、プロ・アマ問わず30組近くの団体が応募したJR九州のCMコンペで、最優秀賞を受賞した河野さんの作品だ。彼は今、限られた時間で思いを伝えるクリエイティブな世界に夢になっている。

現在は、映像制作の世界で実務経験を持つ小島教授の研究室で研鑽を積んでいる。今回のコンペ作品は、「テンポ良く」「インパクトを残す」ことに重きを置いた。どうすれば印象に残る映像にできるのかを考え導き出したのは「ラップ電車」というアイデア。先方からのさまざまなポイントを押しえながら、試行錯誤を重ねた。行き詰まったときには、教授に相談し、的確なアドバイスをもらいながら一つひとつ作り上げていったという。絵コンテ描きから、動画の素材集め、編集まで全てを1人で担当した作品は、彼の代表作となった。

今年3月には別府ブルーバード劇場にて行われる「大分学生映画祭」にも参加し、別府市に住む重度知的障害を持つ14歳の少年と、その家族を題材にした20分のドキュメンタリーを発表した。「漫画家であるその子のお母さんのエッセイ作品を取り入れながら、家族が抱える思いや葛藤を描きました」。15秒のCMと異なり、見る人が飽きないように、かつ見応えのある作品を作るにはかなりの労力がかかったが、「評価は上々」だと自信をのぞかせる。

他にも地元の自動車学校のCMや、工場見学に訪れた子

どもたちに見せる企業のプロモーションビデオなど、研究室のメンバーとともに多くの映像制作・編集を手がけている。「勉強を兼ねて様々な映画やCMを見るのが趣味」といって映像漬けの毎日なのだが、映像に興味を持つようになったのは、意外にも大学に入学してからのこと。元々デザインやグラフィックに関心がありNBUへの入学を決めたが、小島教授の講義を受講するうちに映像分野への興味が湧いたという。「第一線で活躍した先生に、プロの技を教えてもらっている。映像制作会社に入っても即戦力として役立つような経験ができています」。

大学での専門性の高い学びを活かして、卒業後は地元の映像制作会社へ就職し、ディレクターやカメラマン、編集と映像に関わる仕事を幅広く経験したいという。「CMはもちろん、バラエティもドキュメンタリーもジャンル関係なく、地元の魅力をPRしていけるような作品を制作していきたい」と大志を抱く。次はどんな作品で私たちを驚かせてくれるのか、大分を盛り上げるクリエイターとしての河野さんの才能に期待したい。



かわの しんや(大分県/県立津久見高校出身)/日ごろから新聞やWebサイトなど、さまざまなメディアをリサーチしながら日常に転がるネタを探す。「研究室の後輩たちにも、自分の経験を伝え、それをもとに、より良い映像作品を作ってもらえたら」と話す。

様々なフィールドで活躍する
NBU生の「リアル」に密着。
学生が描き出す、色とりどりの世界を
ご紹介します。

NBU

COLORS



17

工学部 建築学科4年

調 菜月

(長崎県/県立対馬高校出身)

使う人に喜ばれる 公共施設をつくりたい

建築学科に進んだのは、大工だった祖父が自身の家を設計して自ら建てる姿を見て「カッコいいな」と思ったからだ。大学で建築を学ぶ中でさまざまな壁にぶつかりつつも、設計会社で働いて公共施設をつくりたいという明確な目標に向かって、自分に厳しく授業や課題に取り組んできた。卒業研究は、出身地である長崎県対馬の住民の憩いの場となる「ギャラリー併設の図書館の建設」がテーマだったが、卒業発表を終えてもたくさんの課題が見えてきたという。その反省を踏まえ、「今後も使う人のことを様々な角度から考えた設計をしていきたい」と意気込む。4月から勤務するのは、正課外活動でフィールドにしていた豊後大野市にある建築設計事務所。公共施設を手がけていることに加え、大学の先輩が働いていることも大きな決め手になった。「公共施設は完成後、実際に住民たちが利用する姿を見ることができ、自分がこだわった部分がかちゃんと使われていたら嬉しいし、それが仕事をする上での糧になる」。1人の設計士として、建築の知識と技術をさらに磨いていきたいと決意を新たにす。就職を目前に控え、すでにやる気は充分だ。



【自慢の1カット】

西村研究室で、建築や設計についての学びを深めた。当初、道の駅の建築をテーマに卒業設計を進めていたが、地元住民の憩いの場をつくるという観点から、図書館の建築に方針を変更したという。



18

経営経済学部 経営経済学科3年

佐藤 航通

(宮崎県/県立延岡星雲高校出身)

多様な交流で得た気づきが 自信と成長につながった

里山保全を中心に活動する「四季の森プロジェクト」でプロジェクトリーダーを務めた佐藤さん。民間企業と一緒に環境保全活動への参加、大分県椎茸農業共同組合の方々と協働でしいたけ生産体験などを牽引した。特に印象的だったのは「トヨタ・ソーシャルフェス」。プログラム構成やスケジュール管理、人員配置など過去の反省点を活かし、活動の目標を明確化。逐一メンバー内で状況を共有することでスムーズに進行させることができた。また、大学3年の夏にはNBUの協定校であるイギリスのBurton and South Derbyshire COLLEGEに1ヶ月間の短期語学留学。現地の方と積極的に交流したことで、新たな気づきを得た。「日本では意見に対して否定から入ることが多いと感じていたが、海外ではまず肯定してくれる。受け入れるという姿勢を持つことの大切さを学べた」。様々な経験を通して、人との関わり方の意識が変わり、自分に自信も生まれ、現在、営業の仕事を目指して就職活動中。チームを動かす成果を出す、敏腕の営業リーダーを志す。



【自慢の1カット】

ウミガメの産卵に適した環境を整備するため、ビーチクリーニングと防風柵作りに取り組んだ「トヨタ・ソーシャルフェス」。環境保全の重要さと地域と積極的に関わることの意義を学んだ。



19

工学部 航空宇宙工学科3年

バンサクルン ノンチャラク

(タイ/柳川高校出身)

「日本の技術をタイへ」 留学で夢を叶えたい

高校1年生のときに日本に留学し、3年間みっちり日本語の勉強に取り組んだ。宇宙飛行士になりたいという思いから、NBUの航空宇宙工学科に進学した。卒業後、まずは日本でエンジニアとして経験を積み、将来的にはタイに帰って日本の技術で地元へ貢献したいという夢を抱く。日本に来たばかりの頃は、ルールの厳しさに驚きつつも、日本人のマナーや礼儀に感動し、自身の行動を省みるきっかけになったという。誰にでも明るく振舞う彼女だが、日本語もわからずタイに帰りたと思うこともあった。そんなとき、タイの家族に相談すると、決して帰っておいでとは言わず、「頑張って夢を追いかけてごらん」と優しく背中を押してくれたそうだ。そんな家族の支えもあって、今では楽しい大学生活を送る。普段は、授業以外にも、地域の公民館で開催されたスポーツ大会、阿蘇で行われたキャンプなど、様々なイベントにも積極的に参加。大学生活最後の「一木祭」では、タイの文化を知ってもらいたいという思いから、タイ風焼きそば「パッタイ」の模擬店を出したいと話す彼女のほじける笑顔が眩しかった。



【自慢の1カット】

地域の団体「留学生と交流を進める会」が開催したスポーツ大会では、様々な国や地域の人と一緒に、ミニバレーボールを楽しんだ。バレーの後はお弁当を食べながら歓談し、地域の人との交流を深めた。



20

工学部 建築学科3年

寺嶋 敏也

(大分県/県立佐伯豊南高校出身)

3度のカンボジア滞在が 将来の道しるべに

「海外を訪れ、建設の視点から教育現場をサポートするボランティアがしたい」と一念発起。大学2年のとき、恩師に紹介してもらったのが、カンボジアの子どものための教育のために活動する「NPO法人はちどりプロジェクト」だった。彼はこのプロジェクトの一貫で、これまで3回、合計1ヶ月半ほどカンボジアのプレイクシオン村に滞在して、村人が働くための工場の建設支援や、子どもたちへの教育支援などのボランティア活動を行った。働く場所がないためタイへ出稼ぎに行く人が多く、学校に通えない子どもも多いという村の現実を目の当たりにした彼は、大学で学べることのありがたみや、自分を学校に通わせてくれている親への感謝の気持ちをあらためて実感。「カンボジアでの経験を通して、ゆくゆくは発展途上国の道路をつくりたいと思うようになりました。インフラが整い、物流が発展すれば子どもたちの明るい未来につながると思うので」。現在、建設業界を目指し就職試験の真っ最中。世界に視野を広げ、夢に向かって着実に歩みを進めている。



【自慢の1カット】

「カンボジアを支援のいらない国に」を最終目標として掲げるはちどりプロジェクト。現地では、工場の建設作業に汗を流したり、近所の子どもたちと触れ合ったり、充実したボランティア生活を送った。

キラリびと

NBUのキャンパス内で「キラリ」と輝くあなたを発見!



工学部 情報メディア学科3年

佐藤 里津

(大分県/楊志館高校出身)

「勝ち負けがはっきりして分かりやすいところがいいですね」と、相撲の魅力を語る佐藤さん。幼い頃、兄の影響で始めた相撲は、国際大会2連覇という輝かしい成績を持つ。先日は、モンゴルをはじめとする留学生たちと一緒に大相撲大分場所の観戦へ。相撲の魅力を伝え、実際に力士の取組や練習風景を目の前に、留学生たちは大喜びだったという。現在はさまざまな企業のインターンシップに参加し、将来の夢を探している最中だそう。大学生活も残すところあと1年。最後となる相撲の大会はもちろん、就職活動や卒業研究でも白星を期待しています。